

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 9 月 1 日現在

機関番号：11601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653311

研究課題名(和文) ADHD児の「興味の多様性」を活かした漢字の書字支援がキャリア教育に及ぼす効果

研究課題名(英文) Teaching handwriting behavior of Kanji-character to children with ADHD

研究代表者

鶴巻 正子 (TSURUMAKI, Masako)

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：40272091

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：教師へのアンケートや保護者への聞き取りから ADHDをはじめとする発達障害の子どもの興味の多様性を明らかにすることを試みたところ、子どものささやかな発達や成長のあらわれ、障害特性を含んだ活動に対しても子どもが楽しそう・うれしそうと感じている活動として共感的な視点から肯定的に見ていることが明らかとなった。集中できる時間が短い、関心を持つ分野が狭いなど発達障害の特性を考慮した漢字の書字に対する個別指導をとおして、書字に対して拒否や苦手意識を示す通常学級在籍の ADHDや ASDの子どもが、自分とともに他の子どものために作る漢字の書字問題作成に興味をもって取り組むことが示された。

研究成果の概要(英文)：From a questionnaire to teachers and the hearing to mothers of children with ADHD, it became clear that they showed an empathic attitude to carelessness or hyperactivity. We taught handwriting behavior of Kanji-characters to children with developmental disabilities, using the individual program for children who are not good at handwriting Kanji-characters and show carelessness or hyperactivity. They set about their work positively with the kanji writing program.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：ADHD 漢字 書字 キャリア教育

1. 研究開始当初の背景

ADHD の子どもは、ときに学級内の秩序を乱し、自尊心が低下し、二次障害として反抗挑戦性障害や行為障害に進むおそれがあるなど、国内・国外において「ネガティブな循環」から説明されることが多い。ADHD の研究は心理的社会的リスク・マネジメントが中心課題であった。代表者は ADHD のある子どもを対象とした教育相談「わかば教室」を主催し、ドリル練習に頼らない漢字の書字学習を検討してきた。この支援の過程で、ADHD のある子どもの発想の豊かさや着眼点のユニークさなど「興味の多様性」に感心させられる場面が何度もあった。本研究課題では、代表者のこれまでの研究成果である個別式「e-支援」システムに、ADHD のある子どもの「興味の多様性」を反映させた漢字学習法を導入した「子ども自らが作りだす教材」による学習方法により、キャリア教育における「自己形成」になんらかの効果を与えられないか検討することを目指した。

2. 研究の目的

ADHD のある子どもは落ち着きがなく、読み書きや算数・数学など学業に遅れが生じ、自己評価が下がり、二次障害に進行するおそれがあるなど、負の循環の視点から理解されることが多い。本研究課題では、このネガティブな見方を逆転させ、「興味の多様性」として捉え直し、それを ADHD の子どもが困難を抱えやすい漢字学習に活かすことで、小中学生のキャリア教育の「自己形成」にどのような影響を及ぼすか明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) ADHD のある子どもに対してとられるネガティブな見方を逆転させ、「興味の多様性」としてとらえ明らかにする。

(2) 個別式 e-支援システムに「興味の多様性」を反映させたシステムを開発することで、ADHD の子ども本人による書字練習コンテンツの作成が可能か検討する。

4. 研究成果

(1) 現職教員 137 名に発達障害が「無い」と思われる子どもと、発達障害が「有る」と思われる子どものエピソードを記入するよう依頼した。その際、「子ども達が、日頃、どんな出来事に『うれしかった』『あるいは』『楽しかった』の感情を持っていると思うか、『最近の様子』もあわせて記入するよう依頼した。

89 名より回答を得た(65.0%)。現任教の内訳は、幼稚園(2名)、小学校(36名)、中学校(6名)、高等学校(2名)、特別支援学校(31名)、養護教諭(10名)、その他(保育士1名、講師1名)であった。教職歴は9年以下(14名)、10~19年(24名)、20~29年(23名)、30年以上(21名)、未記入(7名)であった。

収集されたエピソードは142例で、発達障害「無」が62例、「有」が80例だった。「無」群は29例が男子、25例が女子、8例は未記入だった。また、「有」群は男子が62例、女子が15例、未記入が3例だった。収集された場所は両群とも学校・幼稚園等が最も多く、「無」群が46例(74.2%)、「有」群が66例(82.5%)であった。

具体的なエピソードを KJ 法により表 1 のように分類し、発達障害「無」群と「有」群の各カテゴリの度数について Fisher's exact test を行ったところ、発達障害の有無によるカテゴリの偏りは有意であった ($p < .001$)。発達障害「有」群では、小さな発達・成長の喜び(e.g., 整列できた)、障害特性も含んだ楽しい活動(e.g., 水遊び)など、発達障害「無」群では報告されなかったエピソードが含まれていた。教師は、ささやかな発達・成長のあらわれや障害の特性といえそうな活動に対しても、それらをネガティブに判断するのではなく、子どものうれしそうな様子や楽しそうな様子を共感的な視点から肯定的にみているといえる。ADHD はじめ発達障害のある子どもたちに対する教師の態度変化が起こっていることが示唆される結果であった。

表 1 発達障害「有」群と「無」群の「うれしい活動・楽しい活動」のエピソード(度数)

カテゴリ	「無」	「有」
マイルストーン的な発達・成長	19	0
小さな発達・成長の喜び	0	34
他の子どもよりも高い大きな達成	11	9
楽しい活動	22	0
障害特性も含んだ楽しい活動	0	16
ほめられた	7	13
その他	3	8

(2) 板書や手本の書き写し、新出漢字の獲得と維持など発達障害児が示す漢字の書字に関する困難さに対し、視覚機能向上や作業療法介入(運動支援)、情報機器や自己記録の活用など多方面からの検討が盛んになりつつある。鶴巻・仁平はこれまで ADHD を主とする発達障害児の漢字学習に対する主観的な負荷の存在と学習支援の効果、教師の漢字学習に対する要求の実態を明らかにする(2010a, 2010b)とともに、構成見本合わせ課題(CRMTS)を用いた漢字の書字指導を進めてきた(鶴巻, 2005)。発達障害児による漢字の問題作成が可能な支援システムを開発し実践的な研究を行った。

本人と保護者から了承を得た小5男子2名と小4男子1名が参加した。3名とも通常学級に在籍している。AとBはADHDを含む発達

障害の診断があり、C は多動傾向を示す児童である。3 名とも漢字の読字に比べ書字に対する苦手意識が顕著である。

鶴巻ら(2003)が開発した個別式 e-支援システムを改良し、漢字学習に困難を示す子どもが自ら活用できるよう開発した漢字の書字支援システムを用いた。

小学校第 4 学年配当漢字 200 字のうち偏と旁、かんむりとあしに分けることができる 178 字を参加者が選択可能な漢字とした。実施には 17.3 型ディスプレイ(富士通モバイルワークステーション CELSIUS H910)とマウスを使用した。実施にあたっては福島大学倫理審査委員会の了承を得た。

指導者が選択した漢字と参加者自身が選択した漢字を用いて書字練習用の課題を作成させた。3 名とも DVD や映画、家族旅行先などそれぞれにとって身近な話題を中心に、学校生活における漢字学習ではなかなか見られないユニークな問題文を次々に作った。

3 名とも漢字の書字に困難さをかかえるとともに、保護者の希望やパソコン学習の実態に基づきローマ字入力を使用した。ローマ字読みの習得が不完全だったため問題文入力に時間を要した。しかし自分以外の誰かも解答する問題文の作成であることに意欲を示し、入力課題と手書き課題のいずれにも全員が意欲的に取り組み、終了後には「楽しかった」「意外にいいね」などの言語反応が自発的に示された。また、参加者のきょうだいでも多動傾向と書字学習に困難さを示す子どもからも、「自分も漢字の勉強をやりたい」と要望がだされた。これらの結果から、なりたい自分に気づき、肯定的な自己理解と自己有用感に基づき将来を考えるという自己形成における経験になったと判断される。集中できる時間が短い、関心を持つ分野が狭いなど発達障害の特性を考慮した漢字の書字に対する個別指導をとおして、書字に対して拒否や苦手意識を示す通常学級在籍の発達障害の子どもが、自分とともに他の子どものために作る漢字の書字問題作成に興味をもって取り組むことが示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

鶴巻正子, 教育相談「わかば教室」における発達障害児への漢字の書字支援, 福島大学総合教育研究センター紀要, 査読有, 第 15 号, 2013, 43-50.

玉木宏樹・鶴巻正子, 発達障害児における漢字の書字 - 漢字書字の細部エラーに対する教師の評価に影響を及ぼす要因 -, 福島大学総合教育研究センター紀要, 査読有, 第 15 号, 2013, 69-76.

仁平義明, 急速反復書字によるスリップの発生メカニズム: ADHD 傾向のアナログ研究,

白鷗大学教育学部論集, 査読有, 7, 2013, 127-141.

仁平義明, “サイバーいじめ”に関する研究の動向 - 対応のためのエビデンス, 白鷗大学情報処理教育センター年報, 査読有, 6, 2013, 1-7.

[学会発表](計 13 件)

鶴巻正子, 発達障害児への漢字の書字支援, 科研費合同シンポ科学研究費合同シンポジウム, 2014 年 03 月 02 日, いわき明星大学.

仁平義明, 発達障害者の顔認知 - Embedded Faces Test (EFAT) 基準作成の試み -, 科研費合同シンポ科学研究費合同シンポジウム, 2014 年 03 月 02 日, いわき明星大学.

仁平義明, 12 の障害の“いじめ被害発生率”のちがいは: プレイクたちによる全米大規模追跡調査の分析, 東北 ADHD 研究会第 5 回研究会, 2013 年 12 月 08 日, 福島大学.

玉木宏樹・鶴巻正子, 発達障害児における書字課題と教示方略の違いによる書字反応への効果, 日本特殊教育学会第 51 回大会, 2013 年 08 月 30 日, 明星大学.

米沢祐子・鶴巻正子, 個別の指導計画をはじめて作成する学生への支援の効果 - 目標設定と支援方法の立案に対するヒント集の活用 -, 日本特殊教育学会第 51 回大会, 2013 年 08 月 30 日, 明星大学.

高橋純一・玉木宏樹・鶴巻正子, 発達障害/発達障害が疑われる児童の心的操作に関する予備的検討, 日本認知心理学会第 11 回大会, 2013 年 06 月 29 日, 筑波大学.

鶴巻正子・仁平義明, 発達障害児が作る漢字の書字問題(1) - 問題作成までの予備的研究 -, 東北心理学会第 67 回大会, 2013 年 05 月 12 日, 東北工業大学.

玉木宏樹・鶴巻正子, 漢字評価における教員の認識 - 父性・母性に着目して -, 東北心理学会第 67 回大会, 2013 年 05 月 12 日, 東北工業大学.

米沢祐子・鶴巻正子, 発達障害幼児のための個別の指導計画作成 - 作成経験のない学生が感じる困難さ -, 東北心理学会第 67 回大会, 2013 年 05 月 12 日, 東北工業大学.

鶴巻正子・仁平義明・佐藤拓, 教師が感じる発達障害児にとっての「うれしい活動・楽しい活動」, 東北心理学会第 66 回大会・新潟心理学会第 49 回大会合同大会, 2012 年 07 月 15 日, 新潟大学.

鶴巻正子・仁平義明, ADHD 児の「興味の多様性」を活かした漢字の書字支援がキャリア教育に及ぼす効果 - 子どもにとっての「うれしかった」「楽しかった」出来事を教師はどのように把握しているか -, 東北 ADHD 研究会設立総会・第 1 回研究集会, 2012 年 03 月 24 日, 福島大学.

鶴巻正子, 障害のある子どもにおけるキャ

リア学習の位置づけ，東北 ADHD 研究会設立総会・第 1 回研究集会，2012 年 03 月 24 日，福島大学。

仁平義明・高原萌・佐藤拓，ADHD 傾向に有利な課題 モーゼ錯覚課題の場合，東北 ADHD 研究会設立総会・第 1 回研究集会 2012 年 03 月 24 日，福島大学。

〔その他〕

ホームページ等

<http://t-lab.educ.fukushima-u.ac.jp/study/login/>

6．研究組織

(1)研究代表者

鶴巻 正子 (TSURUMAKI Masako)

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：23653311

(2)研究分担者

仁平 義明 (NIHEI Yoshiaki)

白鷗大学・教育学部・教授

研究者番号：10007833